特別活動で培われた力を生かした青少年育成に関する研究
～兵庫県神戸市北区唐櫃台地区における中学生・高校生による地域活動への参画～

藤原靖浩
（関西学院大学大学院）

【要旨】
近年、家庭・学校・地域社会等、子どもをめぐる環境は大きく変化し、子どもに関する様々な問題が取りあげられている。現代の子どもが抱える問題を解決するためには、家庭・学校・地域社会の三者が緊密に協力することが必要である。本研究では、地域社会の教育力を向上するためのモデルケースとして、中・高校生が実際に主体的かつ自主的に地域活動に参画した事例を取りあげる。そして、中・高校生が、地域社会で行われる各種行事に対して、話合い活動を行った事例を通して、次の２点について検証した。①中・高校生は、特別活動で培った話合い活動の力をどのように生かしているか、②活動を通して、中・高校生にどのような変化が見られたか。その結果、中・高校生の集団参画の力について示された。

1.問題と目的

近年、家庭・学校・地域社会等、子ども[1]を巡る環境は大きく変化し、学校教育現場では、不登校をはじめとする子どもに関する様々な問題が見られる。現代の子どもが抱える問題は、家庭や学校だけで改善できるものではなく、家庭・学校・地域社会の三者が緊密に協力し合ってこそ改善の糸口を見つけることが可能になる。

しかしながら、現状を見ると、子どもが社会生活を送る上で最も基本となる場所であるはずの家庭では、育児放棄（ネグレクト）、過保護、過干渉、放任、育児不安、不十分なしつけ等「家族の危機」[2]的な現象が生じている。現在の家族では、少子化、核家族化、両親の共働きの増加等によって、その機能が崩壊もしくは衰退していると言われる。崩壊とまではいかなくとも、家庭のあり様が近年急速に変化しているという認識は人々の間で共有され、多くの人々が今後の家庭の機能についてある種の危機感を抱いている[3]。

ところで、現代の日本は「学校化した社会」であると言われる。学校化（schooled）とはイリッチによって一般的に使用されるようになった用語である。子どもが学校化されると、例えば卒業証書をもらえればそれだけで能力があると思いこむように、「教授されることと学習することを混同する」[4]ようになり、制度のもとで生きることを選択して自律的な（自主的な）考え方や学び方を放棄するようになる。そして、「価値の代わりに制度によるサービスを受け入れる」[5]ことに疑問を持たず、自律的、協働的な生き方を捨て去るようになる。学校化が進んだ社会では、安部の指摘するように「受験に合格するための知識を得る手段として学習塾に通い学校の授業の数段先を習い授業に物足りなさを感じている子どもと、授業に興味を示さない学習意欲に乏しい落ちこぼれの子どもとの二極化を招き、学校は主たる学習の場としての機能を失いつつある」[6]という状況が生じている。

学校化した社会は、学校を子どもにとって窮屈な場所へと変え、同時に、家庭が学校化

する状態を引き起こした。学校化した家庭では、「学校での良い成績」や「他者よりも優れた能力を持つこと」が子どもにとって幸福であるという価値観の中で、「勉強しろ」「人にできないことをしろ」等、学校教育の価値観が家庭教育に持ち込まれる。そして、家庭の学校依存と学校への期待を高めた。学校に対する過度な期待は、自己中心的で理不尽なクレームや要求を執拗に繰り返す保護者を生み、結果、「学校機能の肥大化」[7]の原因の一つとなっている。教育の最前線にいるはずの教師も学習指導要領の改訂やバーンアウト（burn out）などの問題を抱え、子どもに十分な対応ができているとは言い難い。

家庭が学校化し、学校機能が肥大化した現代社会では、地域社会は両者を補完する役割を求められている。かつての地域社会には、子どもの成長を支える機能が内在し、子育ては地域社会共同の責任であった。しかしながら、近年の工業化や都市化に伴い、かつての地域社会にあった近所付き合いの中で形成される人間関係や、地域社会の人間関係は希薄化している。このような状況は、地域社会における教育力の低下をもたらしている。地域社会は、子どもが社会に出ていくために必要な力を身につけるためにも、学校教育で培った力を発揮できる場でなければならない。ところが、地域社会の教育力の低下は、地域社会の中で子どもの活躍する場や機会を減少させている。特に、この傾向は、中・高校生において顕著であり、地域社会は家庭と学校をつなぐ単なる通り道でしかなくなっている。このような実態を改善するたには、青少年[8]の健全育成の視点から、中・高校生が地域社会の中で活躍できる場や機会を提供していくことが急務である。

以上のような点を踏まえて、本研究では、地域社会の教育力を向上するためのモデルケースとして、中・高校生が実際に主体的かつ自主的に地域活動に参画した事例を取り上げる。そして、中・高校生が、地域社会で行われる各種行事に対して、実際に話合い活動を行った事例を通して、①中・高校生は、特別活動で培った話合い活動の力をどのように生かしているか、②活動を通して、中・高校生にどのような変化が見られたかという2点について、実証的な研究を行う。そして、中・高校生の個々の集団参画の力がどのように身についていくのかについて検証することを目的とする。

2.特別活動と地域活動

話合い活動の事例を述べる前に、特別活動と地域活動の関係性について確認し、本研究の背景をより明確にしておきたい。

(1)特別活動と地域活動

特別活動の目標は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことであり、『生徒指導提要』の中でも「自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す」[9]ために、学級活動や学校行事、生徒会活動といった特別活動の場や機会を積極的に活用していくことが求められている。授業時数については、これまでと同様に35時間（小学校1年生は34時間）と定められているが、学力低下論に伴う「総合的な学習の時間」の縮小、必修教科の時間数増加等、特別活動以上に子どもに基礎学力を身につけさせることが重要であるとされている。そのような状況の中でも、特別活動は子どもの社会性を育てるという点で、その重要性が指摘されている[10]。それを受けて、学校教育

現場では、限られた時間の中で、創意工夫しながら様々な活動を展開している。しかし、未だ特別活動が十分に機能しているとは言えず、特別活動で培われた力を地域社会の中で生かす機会は、中・高校生にとって決して多いとは言えない。特別活動は、地域社会の活動と連続していることが理想的であるが[11]、学校で行われている特別活動は、各活動が独立しており、そこでは中・高校生が、活動を通して十分な力を身につけることも、特別活動で培ってきた力を発揮することも困難である。この意味において、現在の地域社会には、中・高校生が主体的に地域活動に参画することが可能な場や機会を設けることが求められている。

特別活動の目標に示されているとおり、各活動では、よりよい人間関係を構築しようとしたり、自ら進んでよりよい生活をつくるための計画に加わろうとしたり、学級や学校の諸問題を自ら進んで解決しようとしたりする態度を育てる教育活動という特質がある。これらの力を地域社会で発揮する場合、よりよい地域社会を構築するために、自ら進んでその計画に加わろうとしたり、地域社会の諸問題を自ら進んで解決するという自主的・実践的な態度が見られなければならない。

このように見ていくと、地域社会の教育力の向上のためには、これからの地域社会に貢献できる青少年を育成することが重要である。このような問題意識に基づいて、本研究では、兵庫県神戸市北区唐櫃台地区という非常に限定された地域社会ではあるが、そこで行われている青少年健全育成の活動に焦点を当て、中・高校生が話合い活動を行い、地域行事に参画した事例を取りあげる。その活動を学校教育課程の特別活動の延長線上にあるものとして位置づけ、中・高校生が地域活動という場で、特別活動を通して培った力をどのように発揮し、また、どのような力が高められたのかについて検証していく。

(2)対象地域と青少年育成協議会

本研究で対象とする兵庫県神戸市北区唐櫃台地区は、六甲山の中腹に位置し、観光地としても有名な有馬温泉に並立している。唐櫃台地区は、幼稚園、小・中学校、公立高校が同じ地域にあり、幼小中の期間は生徒もそのまま進学し、引っ越し等の事情が無ければ、他の地域から子どもが入って来ないという昔ながらの環境にある。しかしながら、ここ10数年の間に唐櫃台地区では、夏祭りの中止等地域活動が減少している。これは高齢化の進行だけでなく、活動に積極的に参加する地区の青少年が減少したことに原因がある。小・中学校のPTA活動や地域行事においても、中・高校生が小学生等、異年齢の子どもと交流するために活動に参加するなど、異年齢の交流を図る活動はほとんど行われてこなかった。

このような現状を受けて、唐櫃台地区の青少年育成協議会[12]（以下、青少協）は、幼児から小学校低学年までの子どもを対象とした地域活動を行ってきた。しかし、これまでの活動記録を見ても、幼児や小学生の参加人数は多いものの、活動の中に中・高校生と幼児・小学生との関わりなど異年齢の交流を十分に確認することはできなかった。また、青少協に所属しているのは地区に住む高齢者が多く、若い世代が青少協に参加する姿は確認できなかった。ゆえに、筆者は、現在行われている地域活動を活用した異年齢の交流、青少協主催の地域活動に中・高校生を主体的にボランティアとして参加させることを提案した。なお、筆者が青少協の行う地域活動を対象にした理由は、青少協の育成委員の活動の1つである「地域ぐるみの健全育成活動」にある。「地域ぐるみの健全育成活動」は、「自尊感情などの豊かな心や健やかな体を育む上で大切な機会」[13]であり、「異年齢・異世代交流や

体験活動の推進」が主たる目的として掲げられている。そして、青少年が行事の企画・運営に積極的に参画し、子どもの年齢に合った責任や役割を持たせるように工夫すること、地域社会の中に居場所をつくり、子どもが地域社会の一員として溶け込めるように配慮することが必要であるとしている。このような青少年健全育成の視点を基に行われる活動は、特別活動で身につけた力を発揮する適切な場であると考えられる。

3.方法

(1)夏祭りの再生に向けて

平成22年7月より、「唐櫃台地区の夏祭りの再生」を目標に、中・高校生が青少協主催の地域活動にボランティアとして参加する活動がスタートした。平成23年1月に、唐櫃台地区に住む高校生N（当時高校2年生）の協力の下、地域活動に興味を持った6名の高校生を召集し、ボランティアの中心として活動を開始した。当初は、青少協が準備した地域活動に中・高校生が参加するという形に留まっていたが、平成23年6月に行われた「からポンフェスティバル」を契機に、話合い活動を通して、従来の地域活動に中・高校生が企画した活動を取り入れる活動を始めた。夏期休暇中は、高校生を中心に、花火や流しそうめんなど夏に関する活動を通して、地域社会の子どもと異年齢の交流を深めるための活動を企画・実践してきた。これらの活動は全て中・高校生が話合い活動を通して創り上げてきた活動である。中・高校生は、自分たちの所属するこの集団を「地域社会参画型教育ボランティア団体」と位置付け、現在でも地域活動に積極的に参画している[14]。以下では、この活動の中心となっている高校生が行った話合い活動を取り上げ、話合い活動後に毎回行ってきた「話合いに関するアンケート調査」（質問紙）を下に、中・高校生が地域活動という場で、特別活動を通して培った力をどのように発揮したか、また、どのような力が高められたのかについて検証する。

(2)質問紙調査概要

話合い活動終了後、話合いに参加したメンバーには、毎回調査用紙に記入してもらい、その結果を数値化した。1つ1つの話合い活動につながりを持たせ、成長を実感させることで、自己理解を深め、自己効力感を高める効果が期待できる。アンケート調査の質問項目は、特別活動で身につけることが期待される能力を基に「Q1 話し合い活動」「Q2 集団活動」「Q3 評価・振り返り」「Q4 自分に関する内容」「Q5 集団に関する内容」「Q4-1～Q4-4 自尊感情」「Q4-5～Q4-9 共感性」「Q4-10 キャリア形成」「Q4-11 逆転項目」「Q5-1,2,5,9,10 集団満足感」「Q5-3,4,6,7,8 集団参与」まで、合計41個作成された。また、各質問項目について4段階評定（「3.できる」「2.まあまあできる」「1.あまりできない」「0.できない」）で回答を求めた。（内容については第1図）なお、結果は単純集計で算出している。

4.事例と考察

(1)事例1「流しそうめん」

ここで取り上げる事例は、「流しそうめん」[15]についての話合い活動である。この話合いは7月29日以降反省会を含めて、合計6回行われた。アンケート調査の結果は第2図に示している。ここでは、「流しそうめん」についての話合い活動の結果を、集団に関する質問項目と個人に関する質問項目に焦点を当てて分析する。なお、2.0 超は「できている」

項目と判断し、2.0 未満は「できていない」項目と判断した。

話合いに関するアンケート調査	
Q1 話合い活動	Q4 1～4 自尊感情
Q1-1:私は、話合いで意見を出すことができます。	Q4-1:私には、よいところがあります。
Q1-2:私は、みんなの前で発表や発言をすることができます。	Q4-2:私は、自分のことを大切だと思っています。
Q1-3:私は、他の人の意見をきちんと聞くことができます。	Q4-3:私は、人の役に立っていると思います。
Q1-4:私は、他の人の意見を大切にすることができます。	Q4-4:私には、自信をもってやれることがあります。
Q1-5:私は、他の人の意見に自分の意見を述べて、つないだり深めたりすることができます。	Q4 5～9 共感性
Q1-6:私は、話合いで出されたいくつかの意見をまとめることができます。	Q4-5:私は、やる気になれば、だいたいのことはできると思います。
Q1-7:私は、話合いで司会をすることができます。	Q4-6:私は、悲しんでいる人を見ると、悲しい気持ちになります。
Q1-8:私は、あとで他の人が読んで理解できるように記録することができます。	Q4-7:私は、困っている人を見ると助けたくなります。
Q1-9:私は、話合いの大切なことや発言を適切に板書することができます。	Q4-8:私は、楽しそうな人を見ると、楽しい気持ちになります。
Q2 集団活動	Q4-9:私は、自信のなさそうな人を見ると、はげましそうという気持ちになります。
Q2-1:私は、学年が違う人と活動をすることができます。	Q4 10 キャリア形成
Q2-2:私は、みんなで決めたルール(きまり)を実行することができます。	Q4-10:私は、将来の夢や目標について考えています。
Q2-3:私は、活動のときにみんなをまとめて活動することができます。	Q4 11 逆転項目
Q2-4:私は、必要なときに人に頼むことができます。	Q4-11:私は、自分のことが好きではありません。
Q2-5:私は、リーダーの人を助けて活動することができます。	Q5 1,2,5,9,10 集団満足感
Q2-6:私は、決まりや時間を守って活動することができます。	Q5-1:私のグループには、よいところがあります。
Q2-7:私は、だれとでも分け隔てなく活動をすることができます。	Q5-2:私は、自分のグループが好きです。
Q2-8:私は、みんなと同じ目標に向けて努力することができます。	Q5-5:私のグループには、楽しいことがあります。
Q2-9:私は、工夫して活動に取り組むことができます。	Q5-9:私は、グループへ行くことが楽しみです。
Q2-10:私は、男女だれとでも仲良くすることができます。	Q5-10:私は、いつまでもこのグループが続けばいいなと思います。
Q2-11:私は、自分の役割(当番や係)を最後までやり遂げることができます。	Q5 3,4,6,7,8 集団参与
Q3 評価・振り返り	Q5-3:私は、グループの役に立っていると思います。
Q3-1:私は、集団の一員として行動することができます。	Q5-4:私は、困っているときグループの人に助けてもらえます。
Q3-2:私は、みんなのために発言することができます。	Q5-6:私は、グループの困っている人を助けてあげることができます。
Q3-3:私は、みんなのために行動することができます。	Q5-7:私は、グループでいやなことがあると心配になります。
Q3-4:私は、後片付けをすることができます。	Q5-8:私は、グループでよいことがあるとうれしくなります。
Q3-5:私は、うまくいかなかったことも受け入れることができます。	
Q3-6:私は、活動を振り返って次の活動に生かすことができます。	
Q3-7:私は、行事などで達成感や充実感を感じることがあります。	
Q3-8:私は、今のグループの一員であると感じています。	
Q3-9:私は、工夫して役割に取り組むことができます。	
Q3-10:私は、共同作業の苦労や喜びをみんなと分かち合うことができます。	
Q3-11:私は、みんなでやらなければならないことに協力することができます。	

第 1 図：話合いに関するアンケート調査

①集団に関する質問項目と個人に関する質問項目

男女共にすべての質問で平均値は上昇しているが、質問によって差が大きい。特に「Q41-4 自尊感情」「Q45-9 共感性」など、個人に関する質問項目に差が見られる。男子は集団に関する質問項目、個人に関する質問項目共に高い数値を示しているが、女子は集団に関する質問項目と個人に関する質問項目では数値に差が確認できる。女子は男子よりも自己評価が低くなっている。女子の結果に注目すると、「Q2 集団活動」「Q5 集団満足感」「Q5 集団参与」は最初の話合い（7/29）から、他の項目よりも高い数値を示しており、2.0 超の値を最後まで維持している。この結果から、男女共に集団に関する評価は高くなっていると言える。

項目	話合い活動						項目	集団活動					
月日	7/29	7/31	8/3	8/4	8/11	8/17	月日	7/29	7/31	8/3	8/4	8/11	8/17
S	2.1	2.2	2.4	2.4	2.4	2.4	S	2.3	2.4	2.4	3.0	3.0	3.0
M	2.6	2.4	2.7	2.4	2.7	2.7	M	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
N	1.6	1.7	1.7	1.9	1.9	2.0	N	2.5	2.5	2.5	3.0	3.0	3.0
I	1.4	1.4	1.8	1.8	1.8	1.9	I	1.6	1.7	1.9	1.9	1.9	1.9
A	1.8	1.8	1.9	×	1.9	×	A	2.3	2.3	2.3	×	2.3	×
T	2.0	2.1	2.4	2.3	2.4	2.6	T	2.5	2.5	2.6	2.6	2.6	2.6
H	1.9	1.9	2.0	2.0	2.0	2.0	H	2.0	1.9	2.0	2.1	2.3	2.3
R	1.4	1.7	1.8	1.7	1.9	1.9	R	2.8	2.8	2.9	3.0	3.0	3.0
男子平均	2.0	2.1	2.3	2.2	2.3	2.3	男子平均	2.7	2.7	2.8	3.0	3.0	3.0
女子平均	1.7	1.8	2.0	2.0	2.0	2.1	女子平均	2.2	2.2	2.3	2.4	2.4	2.5
項目	評価・振り返り						項目	自尊感情					
月日	7/29	7/31	8/3	8/4	8/11	8/17	月日	7/29	7/31	8/3	8/4	8/11	8/17
S	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	S	2.8	2.8	3.0	3.0	3.0	3.0
M	2.9	2.9	2.9	2.9	3.0	3.0	M	2.3	2.3	2.5	3.0	3.0	3.0
N	2.1	2.2	2.1	2.2	2.5	2.5	N	1.3	1.3	1.3	1.5	1.8	2.0
I	1.9	2.0	2.1	2.0	2.1	2.1	I	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
A	2.2	2.2	2.3	×	2.3	×	A	1.8	2.0	2.0	×	2.0	×
T	2.5	2.5	2.5	2.5	2.6	2.7	T	1.8	1.8	2.0	1.8	2.0	2.0
H	2.0	2.0	2.1	2.2	2.9	2.9	H	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
R	2.8	2.8	2.9	2.9	3.0	3.0	R	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
男子平均	2.9	2.9	2.9	2.9	3.0	3.0	男子平均	2.7	2.7	2.8	3.0	3.0	3.0
女子平均	2.1	2.2	2.2	2.2	2.5	2.6	女子平均	1.6	1.6	1.7	1.6	1.8	1.8
項目	共感性						項目	キャリア形成					
月日	7/29	7/31	8/3	8/4	8/11	8/17	月日	7/29	7/31	8/3	8/4	8/11	8/17
S	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	S	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
M	2.8	2.8	2.8	3.0	3.0	3.0	M	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
N	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	N	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
I	1.4	1.4	1.6	1.8	1.4	1.6	I	1.0	1.0	1.0	1.0	3.0	3.0
A	1.8	1.8	2.0	×	2.0	×	A	1.0	1.0	1.0	×	1.0	×
T	1.8	1.8	1.6	1.8	2.0	2.0	T	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
H	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	H	2.0	2.0	2.0	2.0	3.0	3.0
R	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	R	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
男子平均	2.7	2.9	2.9	3.0	3.0	3.0	男子平均	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
女子平均	1.9	1.9	2.0	2.1	2.0	2.1	女子平均	2.0	2.0	2.0	2.3	2.6	3.0
項目	集団満足感						項目	集団参与					
月日	7/29	7/31	8/3	8/4	8/11	8/17	月日	7/29	7/31	8/3	8/4	8/11	8/17
S	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	S	2.2	2.4	3.0	3.0	3.0	3.0
M	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	M	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
N	3.0	3.0	3.0	2.0	3.0	3.0	N	2.2	2.2	2.4	2.4	3.0	3.0
I	2.6	2.7	2.0	2.0	2.0	2.2	I	2.2	2.6	1.8	1.8	2.0	2.0
A	3.0	3.0	3.0	×	2.8	×	A	2.2	2.2	2.2	×	2.4	×
T	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	T	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.6
H	2.0	2.0	2.0	2.2	2.6	2.6	H	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
R	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	R	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
男子平均	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	男子平均	2.7	2.8	3.0	3.0	3.0	3.0
女子平均	2.7	2.7	2.6	2.6	2.7	2.7	女子平均	2.2	2.2	2.2	2.2	2.4	2.4

第 2 図：「流しそうめん」話合いアンケート結果

集団に関する評価が高いことは、特別活動の目標の 1 つである「望ましい集団づくり」が促進されたことが示唆されている。特別活動の基本的な性格について『生徒指導提要』では「(1) 所属する集団を、自分たちの力によって円滑に運営することを学ぶ」「(2) 所属する集団の中でよりよい人間関係を築き、それぞれが個性や自己の能力を生かし、互いを尊重し合って生きることの大切さを学ぶ」「(3) 集団としての連帯意識を高め、集団（社会）の一員としての望ましい態度や行動の在り方を学ぶ」という 3 点をあげているが、集団意識が高まることによって、個人の能力を高め、生徒指導の目標である自己指導能力を育むこと、そして、自己実現を達成するために必要な自己選択や自己決定の力を身につけることにつながると考えられる。今回の話合い活動の結果では、集団に関する質問項目の数値は継続して男女共に 2.0 を超える高い数値を示していた。そして、集団に関する質問項目の数値が高い数字を維持することで、大きな上がり幅ではないものの「Q41-4 自尊感情」等、個人に関する質問項目の数値も高くなる傾向が見られた。以上の点から、今回の話合い活動を通して、高校生たちは、自分たちにとって望ましい集団を形成したと推定できる。

②話合い活動について

第 2 図の「話合い活動」「集団活動」「評価・振り返り」は、話合い活動に関する質問項目である。「話合い活動」では、I と R が、2.0 を下回っており、十分に話合いが行えなかったと自己評価をしている。紙面の関係上、話合い活動の内容については省略しているが、I は話合いの中で自分の意見を積極的に発言するタイプであった。しかし、流しそうめんの内容を決定する際、I の意見が十分に採用されなかった。I は、「集団活動」の数値も 2.0 を下回っており、自分の意見が十分に採用されなかったことが全体の数値を下げた要因だと考えられる。R は、話合い活動に慣れておらず、話合い活動全体を通して、自分の意見を積極的に発言できないタイプであった。発話のほとんどが、相手の意見の反復もしくは相手への同意であり、自分の意見を述べる機会が十分では無かった。ただし、I、R 共に、話合い活動の振り返りを通して、自己の弱点を発見し、数値は確実に上昇している。I も R も、話合い活動を継続することで、成長を実感することができていると思われる。

「話合い活動」の男子平均、女子平均を見ると、男子は全体的に話合い活動をうまくできたと評価している。女子は、話合い活動当初（7/29、7/31）は、数値が低くなっているが、回数を重ねる度に数値が上昇し、最終的には 2.1（8/17）となっている。これは、高校生全員が、話合い活動の能力を身につけ、成長したことを示唆している。また、話合い活動の数値の上昇に伴って、集団に対する意識も向上している。話合い活動の充実は、よりよい集団づくりと関係していると言えるだろう。さらに、集団に関する質問項目の数値が上昇すると、個人に関する質問項目も上昇する傾向にある。このことは、話合い活動の充実が、全ての数値を上昇させる重要な要素になっていることを明らかにしている。

全体の平均値を見ると 2.0 は超えているものの「話合い活動」に関する数値だけが他に比べて低くなっている。「集団満足感」や「集団参与」については、高い数値を示しているにも関わらず、「話合い活動」の数値が低いことから、話合い活動を円滑に行うためには、集団や個人に関する能力以上に、話合い活動専用の能力を身につけておく必要があることが確認できた。ここでいう話合い活動専用の能力とは、木内のいう「合意形成力」[16]等であるが、これらは一朝一夕に身につくものではなく、今後活動が継続されていく中で、高

められ、育まれていくことが期待される。

③個人のアンケート調査結果

次に、個人のアンケート調査結果に注目して分析する。ここでは、全体的に数値が低かったＩに焦点を当てる。Ｉの数値の中で「Q5･集団満足感」が第３回目の話合い（8/3）を機に2.7から2.0にまで減少している。下がり幅が非常に大きく、「Q5･集団参与」も同時に大きく減少している。詳細については省略するが、８月３日は、試験的に「流しそうめん」の予行演習が行われた日である。Ｉが、その活動に満足できなかったことが数値を低下させた要因の１つであると考えられる。Ｉの「キャリア形成」の数値を見ると、８月11日を機に1.0から3.0に上昇している。Ｉへの聞き取り調査を行ったところ、この要因は話合い活動とは直接関係しないが、８月６日に恋人から「一緒に大学生になろう」と言われたことがきっかけで「自分も大学生になろう」と決心したと話していた。その決意に合わせて、「キャリア形成」だけでなく「評価・振り返り」「集団参与」の値も上昇している。ただし、「共感性」については1.8から1.4へと減少しており、彼氏との関係が向上したことで、周囲の人間関係から「共感性」が減少したことが予測される。これらの結果は、質問紙の結果に、個人の日常生活での出来事が影響を与えていることを示している。Ｉの結果は、今回用いた質問紙の信頼性を高めることができたと考えている。

また、全体の結果を概観すると、「集団満足感」「集団参与」等、集団に関する質問項目は数値が高まっているにも関わらず、個人に関する項目（「自尊感情」「共感性」）に大きな変化は確認できなかった。個人の能力が育まれるためには、やはり長期的な取り組みが必要であり、今後、継続的にデータを積み重ねていく中で、集団に関する能力と個人に関する能力については、より詳細に検証していくことが必要であろう。

(2)事例２「からと児童館夏祭り」

「からと児童館夏祭り」についての話合いは、８月23日、８月25日の２回に渡って行われた。「流しそうめん」の話合いの後、新たにＫ（高校２年生）、Ｕ（高校３年生）が加わり、８月23日の話合いから、新たに「Teamからんちゅ」として高校生10名で話合い活動を行った。単純集計で算出した結果は、第３図に示している。なお、Ｋ、Ｕの値を含めた男子平均・女子平均とＫ、Ｕを含めない男子平均・女子平均をそれぞれ算出している。分析は、「からと児童館夏祭り」の結果のみと「流しそうめん」と「からと児童館夏祭り」を比較した結果の２つの方法で行う。

①「からと児童館夏祭り」の話合い活動の結果のみに注目した場合

はじめに、「Team8（S～Rまでの８名）」のみを対象にした場合の男子平均と女子平均を確認する。第３図を見ると、男子では２回の話合い活動を通して、「自尊感情」「集団満足感」が低下している。この要因を確認するためには、個人の数値を確認していく必要がある。個人の結果を確認すると、「自尊感情」「集団満足感」が低下しているのは、Ｍである。Ｍは部活動関係の用事のため、「からと児童館夏祭り」当日に参加できないことが決定しており、当日参加できない活動に対して、モチベーションが低下したと考えられる。また、８名で算出した平均値を見ると、2.0は超えているものの「話合い活動」の平均値のみが、男女共に低くなっている。ここでも、「話合い活動」にはそれ専用の能力が育まれている必要がある可能性を確認することができた。

項目	話合い活動		項目	集団活動	
月日	8/23	8/25	月日	8/23	8/25
S	2.3	2.6	S	3.0	3.0
M	1.7	1.7	M	1.9	2.0
N	2.0	2.6	N	2.5	2.6
I	1.4	1.6	I	1.9	1.8
A	1.9	2.0	A	2.0	2.1
T	1.7	2.0	T	2.2	2.3
H	2.0	2.1	H	1.9	2.1
R	1.7	2.2	R	3.0	3.0
男子平均	1.9	2.1	男子平均	2.6	2.7
女子平均	1.8	1.9	女子平均	2.1	2.2
K	1.0	1.0	K	1.2	1.3
U	0.7	0.8	U	1.3	1.2
男子平均	1.7	1.9	男子平均	2.3	2.3
女子平均	1.6	1.7	女子平均	2.0	2.0
項目	評価・振り返り		項目	自尊感情	
月日	8/23	8/25	月日	8/23	8/25
S	3.0	3.0	S	3.0	3.0
M	2.2	2.2	M	2.3	2.0
N	2.5	2.7	N	1.8	2.0
I	1.5	1.9	I	1.0	1.3
A	2.2	2.2	A	2.0	2.0
T	2.4	2.5	T	1.8	2.0
H	2.0	2.1	H	2.0	2.0
R	3.0	2.9	R	3.0	3.0
男子平均	2.7	2.7	男子平均	2.8	2.7
女子平均	2.1	2.3	女子平均	1.7	1.9
K	1.1	1.2	K	1.5	1.5
U	0.9	1.1	U	1.0	1.0
男子平均	2.3	2.3	男子平均	2.4	2.4
女子平均	1.9	2.1	女子平均	1.5	1.7
項目	共感性		項目	キャリア形成	
月日	8/23	8/25	月日	8/23	8/25
S	3.0	3.0	S	3.0	3.0
M	2.0	2.0	M	2.0	2.0
N	2.6	2.6	N	3.0	3.0
I	1.4	1.6	I	2.0	2.0
A	2.0	2.0	A	1.0	1.0
T	1.8	1.8	T	3.0	3.0
H	2.0	2.0	H	2.0	2.0
R	3.0	3.0	R	3.0	3.0
男子平均	2.7	2.7	男子平均	2.7	2.7
女子平均	2.0	2.0	女子平均	2.2	2.2
K	1.4	1.4	K	0.0	0.0
U	1.4	1.4	U	1.0	1.0
男子平均	2.4	2.4	男子平均	2.0	2.0
女子平均	1.9	1.9	女子平均	2.0	2.0
項目	集団満足感		項目	集団参与	
月日	8/23	8/25	月日	8/23	8/25
S	3.0	3.0	S	3.0	3.0
M	3.0	2.8	M	2.6	3.0
N	3.0	3.0	N	3.0	3.0
I	2.0	2.0	I	1.8	1.8
A	3.0	3.0	A	2.2	2.2
T	2.8	3.0	T	2.0	2.4
H	2.0	2.0	H	2.0	2.0
R	3.0	3.0	R	3.0	3.0
男子平均	3.0	2.9	男子平均	2.9	3.0
女子平均	2.6	2.6	女子平均	2.8	3.0
K	1.8	1.8	K	1.0	1.0
U	1.8	2.0	U	1.4	1.4
男子平均	2.7	2.7	男子平均	2.4	2.5
女子平均	2.4	2.4	女子平均	2.1	2.1

第３図：「児童館夏祭り」アンケート結果

次に、新しいメンバー（K、U）を加えた結果を分析・考察してみたい。新しく入った２人は非常に数値が低く、ほぼ全ての項目が 2.0 未満になっており、ほとんどの活動に対して「できない」もしくは「あまりできない」と考えていることが分かる。S～R の８名と比較しても、その差は歴然であり、K、U 以外の８名が、これまでに培ってきた能力の高さを可視化することができた。しかし、K、U 共に「集団満足感」は高く、集団に対しては一定の満足感を感じている。「自尊感情」は、男子である K の方が高くなっており、数値の高低に関わらず性別の特徴については、８名の場合も 10 名の場合も大きな変化は見られなかった。なお、K と U を加えた男子平均、女子平均は低下するが、全体で見れば、全ての数値は上昇している傾向にある。

②「流しそうめん」のアンケート結果との比較

８月 17 日の「流しそうめん」の結果（第２図）と８月 23 日、25 日の「からと児童館夏祭り」の結果（第３図）を K と U を除いた８名の数値で比較する。活動を継続しているにも関わらず、男女共に全体的に数値が低下する傾向にあった。

この原因は K と U という新規メンバーの加入にあったと考えられる。対象人数が少ないため、本研究では統計的な処理を行うことはできなかったが、男子の自己評価や集団への評価は、S や M の値が大きく変化しない状態が続いていた。しかし、新しいメンバーが加わったことによって、男子の「集団活動」や「自尊感情」の値に変化が確認できた。新規メンバーが参加したことで、男子メンバーの中に再度自己評価と集団への評価を行おうという意識が生じた可能性が示唆される。

また、「話合い活動」の数値の低下が目立った T に対しては聞き取り調査を行い「初めて、後輩を入れた話合いをして、進め方が分からなくなった」という意見を確認した。今回、K（高校２年生）に話合い活動に参加してもらったことで、話合い活動に先輩―後輩関係が生じ、後輩への配慮や先輩としての意識が、数値として表れたのではないだろうか。

新規メンバーの参加は、これまで形成してきた「望ましい集団」を新たに変化させる試みである。学校教育現場では、学級という決められた単位が存在し、多くの場合年間を通してそのメンバーは変更されない。今回の新規メンバーの参入は、意図的なものではなかったが、中・高校生にとっては、新しい経験を積む良い機会になったと考えられる。

(3)考察

ここまで「流しそうめん」「からと児童館夏祭り」という 2 つの事例の分析・考察を行ってきた。メンバーの新規参入によって、最終的に全体の数値が低下したという結果はあったが、8 つの項目について、特別活動で培った力は十分に発揮されていたのではないだろうか。特に、集団に関する項目は、全体的に高い数値を示しており、話合い活動を通した「望ましい集団の形成」には、成功したと考えられる。「流しそうめん」の話合い活動では、回数を重ねるごとに、男女共に集団に関する数値の上昇に伴って、個人に関する数値の上昇も確認でき、集団形成の成功が個人の能力を高めていくことが示唆された。これは、地域社会で実施される活動の中で中・高校生の能力を高めるためには、学校教育同様、望ましい集団づくりを行うことが必要であるということを示している。また、日常生活の出来事がアンケート調査の結果に反映されていたことは、質問紙の信頼性を高めることにつながる有意義な結果であったと思われる。

ただし、話合い活動の内容に関する質的な高まりと集団の意識がどのような形で向上したのかについて、また話合い活動に必要な具体的な能力については本研究では検証してこなかったが、この点については、今後、逐語録の作成などを通して中・高校生の観察を継続的に行うことで、より詳細な分析を行っていきたい。

4.成果と展望

本研究の目的は、地域社会の教育力を向上させるためのモデルケースとして、中・高校生が、地域社会で行われる各種行事に対して、実際に話合い活動を行った事例を通して、①中・高校生は、特別活動で培った話合い活動の力をどのように生かしているか、②活動を通して、中・高校生にどのような変化が見られたかという 2 点について、実証的な研究を行うことにあった。

今回の事例の検討を通して、中・高校生が学校教育以外の場で、特別活動を通して身につけた力を発揮し、成長している様子を確認してきた。彼らのような中・高校生が地域社会の中で増加し、活動の輪がより広がることによって、5 年、10 年が経過した後に地域社会が活性化し、異年齢の交流を取り戻すことが期待される。唐櫃台地区で行われたこの活動は、特定の地区でしか行うことができない活動では決してない。若い世代のエネルギーを生かすことができる人物が中心となって、活動の口火を切ることができれば、あらゆる地域社会において実践可能な活動である。

なお、今後の発展的な研究として、①夏祭りの復興等、より大規模な活動を行い活動の幅を広げること②中・高校生だけでなく地域社会に住む大学生などの積極的な参画を求めていくこと等があげられる。地域社会における中・高校生の参画は、他者評価ではなく質問紙調査で自己評価を行うことが大切である。これによって、自己理解を深める効果が期待できる。また、中・高校生が主体的に活動を行うことで、活動を楽しむことに重点を置いた話合い活動を展開し、地域社会への共同意識や活動への積極性を育てることができる。

今後、地域社会は家庭・学校の補完を行う場所として、特別活動で培った力を発揮できる場を創り出すことが必要であると言えるだろう。

付記
本研究は、日本学術振興会平成 22 年度科学研究費（基盤研究（C）22531040）、「特別活動における発達課題と評価についての研究」の一部を参考にした。

参考文献

神戸市立唐櫃小学校 120 周年記念誌編集委員会『唐櫃』1993 年、ツタ出版。
佐々木正昭『生徒指導の根本問題―新しい精神主義に基づく学校共同体の構築』2004 年、日本図書センター。

---

1 ここでいう子どもとは、幼児から高校生までの子どもたちを指して使用する。
2 永尾孝尾「現代家族の危機と教育」『アドミニストレーション』第 9 巻、2003 年、熊本県立大学、pp.149-166。
3 松田文子・三宅幹子・森田愛子「現代の教師に求められる生徒指導の理念と実践―家庭の変質の観点から―」『広島大学心理学研究』第 1 号、2001 年。
4 I.イリッチ著、東洋訳『脱学校の社会』東京創元社、1977 年、p.13。
原著：Ivan D.Illich, *The Deschooling Society*, Haper&Row, 1971。
5 同上。
6 安部芳樹「教育改革の一考察―総合的学習と共生社会―」『長崎国際大学論叢』第 1 巻（創刊号）、2001 年、pp.19-27。
7 学校機能の肥大化とは、「これまで家庭や地域社会が果たしていた人間関係の形成や生活体験などの役割のほとんどを学校が担う必要性が生じ、家庭や地域社会も学校にそれらの機能を求めるようになること」を言う。
8 本研究では、青少年の意味を中・高校生と同義として捉えている。
9 文部科学省『生徒指導提要』2010 年、教育図書、p.1。
10 安井一郎他『児童生徒の社会性を育てる特別活動のカリキュラム開発に関する総合的研究』2005 年、甲文堂。
11 特別活動に関係の深い学校教育法（平成 19 年改正）の第 21 条では、義務教育の目標として「一　学校内外における社会的活動を促進し、自主、自立及び協同の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」が掲げられている。特別活動の研究はより幅広く学校外（教育課程外）での教育活動も対象にして進められるべきである。
12 青少協は「青少年の育成及び青少年を取り巻く環境の整備を進めていくこと」を目的として、昭和 27 年に発足した団体である。
13 神戸市青少年育成協議会・神戸市『第 18 期青少年育成委員ハンドブック』2011 年、神戸市少年育成協議会・神戸市、p.15。
14 集団の名称を平成 23 年 7 月に I、A（高 3 女子）の 2 名を加え「Team8」、同年 9 月に K（高 2 男子）U（高 3 女子）を加え「Team からんちゅ」に変更した。なお、結成当初の 6 名は R、M、S（高校 3 年生男子）N、H、T（高校 3 年生女子）と表記している。
15 「流しそうめん」は平成 23 年 8 月 16 日に実施された中・高校生中心の活動である。
16 木内隆生「高等学校特別活動で育成される合意形成力―協創体験過程の実践化に向けて―」『九州女子大学紀要』第 44 巻 3 号、2008 年、九州女子大学・九州女子短期大学、pp.1-15。